教行信證（信卷）

西谷順誓

教行信證（信卷）

西谷順誓

目次

第一章　序　説……三
第一節　行信兩卷の關係……三
第二節　信卷の由來と使命……六
第二章　信卷の特異性……一三
第一節　信の獨立……一三
第二節　絶對の信……一六
第三章　信卷の組織……二〇
第一節　前後二編……二〇
第二節　本願編……二一
第三節　成就編……二四
第四章　信卷の要所（一）……二九
第一節　信の哲學……三〇
第二編　信の總論……三四
第五章　信卷の要所（二）……三七
第一節　三一問答の要旨……三七
第二節　信體論……四〇
第三節　信相論……四五
第六章　信卷の要所（三）……五〇
第一節　信益論……五一
第二節　信と生活……五四

第一節　序　説

さきに講讃しおはつた行卷と、この信卷との關係について、私の所見を端的に表白するならば、法然聖人の念佛往生の教義を、そのまゝのべられたものが行卷であつた。いまそれに次いで、親鸞聖人の信心正因の教義を告白せらるゝのが、この信卷なのである。すでにしば〳〵繰返した通り、念佛往生と信心正因とは、實質的には、別に異つた教義ではなく、同一の事實を、異なりたる命題によりて表現せられたまでゝある、それ故、念佛往生をあらはされた行卷からいへば、信心正因をあらはされた信卷は行卷の再說であると見るべく、又信卷からいへば、行卷は信卷の底本と見ることができるのである。二つの卷が、一つ〳〵完全な、宗教々義をあらはされたものであつて、二つの卷が相依つて、はじめて完全な宗教々義となるのではない、こゝに謂ゆる完全な宗教々義とは、行卷なら、行卷一つで、お淨土參りの道に、少しも缺ぐるところがなく、信卷なら、信卷一つで、少しもお淨土參りに、不足がないといふことを意味するのである。

第一節　行信兩卷の關係

一、從來、行卷は信卷の所信即ち信仰對象をあらはされたものであると、能(信)所(行)の關係を以て、兩卷を取扱はむとするのが、まづ一般の見方になつてゐるのであるが、さういふ見方によると、二つの卷が相依らねば、完全なお淨土參りの道が、明らぬといふことになるのである。すなはち極端にいへば、行卷一つでは、或は信卷一つでは、完全な宗教々義にはならぬといふ道理になるのであるが、行卷でも信卷でも、果してそんな不完全なものであると見てよからふか。親鸞聖人はすでに、行でも參られる、信でも參られるといふ意味をあらはされたのが、行卷の初頭に「按二往相廻向一、有二大行一、有二大信一」といはれたこゝろであり、また行一念釋の前(三九丁右)に「凡就二往相廻向行信一、行則有二一念一、亦信有二一念一」といはれたこゝろであらふとおもふ。即ち行・信は、お淨土參りの因法として、互角であるといふことになるのである。しよせんは如來の絶對他力に參徹するといふことが肝要で、その事實を法然聖人は念佛としてあらはし、親鸞聖人は信心としてあらはしたまふたまでゞある。

二、されば行のところにも、必ず絶對他力があり、信のところにも亦さうである、行卷に稱名を高調しつゝ、名號を明したまふたのも、信卷に衆生の三信の根本として、如來の側で三信を談じたまふたのも、その邊の消息を物語るものである。であるから、行信の兩卷の間で、能(信)所(行)を語るまでもなく、行卷の中に、すでに能(稱名)所(名號)を談じ、信卷の中にまた能(未三信)所(本三信)があるのである。換言すれば、御名のお救ひに、まるまかせになつた貌が、念佛となつてあらはれ、如來のお計ひに一任して、計ひなき貌を信といふのである。だから行卷も信卷も、證卷に明された往生の果に望めると、どちらも因法を明したまふたものであると見るのである。その意味はもちろん、因法を二つ並べるといふことではない、法然聖人の教義を先づ擧げ、次に親鸞聖人の教義を擧げ、念佛往生なら、念佛往生になり切つて了ふのである。信心正因なら、信心正因になり切つて了ふのである。どちらからいつても、他力に參徹するの外にはないから、その他力に參徹するといふことが、行であり、信であり、而して往生の因になるのであるといふことを示したまふたものであらうと思ふ。

三、かやうなお釋は、この御書ばかりでなく、宗祖の他の御書の上にも、かず〳〵例のあることで、短篇の中に、稱名で參られるといはれたり、信心で參られるといはれたりなど、入り混つてゐるやうなことも珍らしくない。從つて「信心を淨土宗の正意としるなり」(銘文六二丁)といはれるとおもふと、「淨土眞宗のならひには、念佛往生とまふすなり」(一多證文二九丁)といはれてあり、一見矛盾せるがごとき感が起らぬでもないが、さういふ問題については、いまの行信兩卷に對する見解が、定まつて居りさへすれば、容易に解釋ができることである。しかして、念佛往生と信心正因とは、同一の事實をあらはす、異つた命題にすぎないといふことも、宗祖は自から「念佛信心の人」(一多證文七丁)といはれたり、「念佛衆生は、金剛の信心をえたる人なり」(同八丁)といはれたりなどしたことから、すぐに明かることである。さうしてみれば、念佛往生の教義(行卷)の外に、信心

正因の教義(信卷)をあらはしたまふ、宗祖の恩召は、奈邊に存したであらうか、同一の事實を、二遍もお出しになる必要がないやうにもおもはれるのである。之れは信卷の造由として、考察せらるべき問題であつて、宗祖御自から、別序の中に表白せられてある通り、當時の教界の情勢といふ外的緣由と、抑え難き御自身の信懷といふ、內的原因とからであつたのである、これやがて信卷の使命であつた。次に之をのぶるであらふ。

第二節　信卷の由來と使命

一、信卷をもつて、行卷の再說と見るとせば、何がゆへに再說せられねばならなかつたか、といふことを考察する必要がある、これについては、この御書の他の何れの卷にも例のない、別序といふものが、信卷にのみ置かれてあるが、この別序を通じて、その理由をうかがふことができる。まづその御文をあげやう。

それおもんみれば、信樂を獲得することは、如來選擇の願心より發起す、眞心を開闡することは、大聖矜哀の善巧より顯彰せり。

しかるに末代の道俗、近世の宗師、自性唯心にしづんで、淨土の眞證を貶す、定散の自心にまよひて、金剛の眞信にくらし。

こゝに愚禿釋の親鸞、諸佛如來の眞說に信順して、論家釋家の宗義を披閱す。ひろく三經の光澤をかうぶりて、ことに一心の華文をひらく、しばらく疑問をいたして、つゐに明證を出す。まことに佛恩の深重なるを念じて、人倫の誹言をはぢず、淨邦をねがふ徒衆、穢域をいふと庶類、取捨をくはふといへども、毀謗を生ずることなかれ。

二、この御文は三節から成り、第一節には、いまこの信卷にのべやうとする信心は、彌陀の本願と、釋迦の教導とによりて生ずるところの、他力の眞信であることを示され、次に當時の教界の情勢を痛歎し、第三節に於て、御自身の信懷を告白せられたものである。よつて第二節と第三節とが、この信卷御製述の由來でもあり、同時にこの卷が有する使命でもある。だいたいこの御書の內容は、眞假合して六卷になつてゐるのであるから、たとへ卷は分れても、ともに一部の御書の內容に相違ないのである、從つて序文のごときも、一つあればよいやうにおもはれるのである。ことに總序の中には、行信の二つについては、三度まで言及され(本書第一卷總序・教卷の第三一頁參照)、行と共に、信の重要性が、十分にあらはれてゐるのである。しかもこゝにまた、別序をおかれたのは、如何なる理由によるであらうか、それをのべられたものが、この別序である。卽ち第二節において痛歎せられたやうに「自性唯心にしづむで、淨土の眞證を貶す」るの徒や、「定散の自心にまよふて、金剛の眞信に昏き」やからがゐるからであつた。この二つはどちらも、前の「行」すなはち法然聖人の弘通したまふ、一念佛往生の法義に、不徹底なるより起る誤謬である。

三、 聖道門の修行者たちが、自性唯心の信仰に立脚して、修行に精進するのならば、いまの問ふところではないが、聖道門の修行が不可能なることを知つて、淨土門に歸依しながら、元の考が全く廢らないために、彌陀も極樂も、自己心内の所產とし、指方立相の淨土を否定するやうなものは、淨土教存在の意義を知らざるものである。之を歎異鈔第十五章には「煩惱具足の身をもて、すでにさとりをひらくといふこと、この條、もてのほかのことにさふらふ」と破斥せられてあるが、これからみるとかやうな誤謬に陷つたものが、當時少なくなかつたやうである。聖道門とちがつて、淨土門では、迷と悟と、凡夫と如來とを相對し、迷ひの凡夫が、彌陀の願力に乘托して、如來の悟りに證入することを特色とするのである。そのことをあらはさんが爲めの淨土開宗であつた、故に法然聖人の法語として、勅修御傳卷六（法然聖人全集八二三頁）に「われ淨土宗をたつる心は、凡夫の報土にむまるゝことを、しめさんがためなり」といはれてある。然らば謂ゆる凡夫の往生は、如何にして成ずるであらうか、同卷の初めに「末世の凡夫、彌陀の名號を稱せば、かの佛の願に乘じて、たしかに往生をうかべかりけり」といはれてある、これ卽ち念佛往生の法義である。之を歎異鈔の第十五章には「淨土眞宗には、今生に本願を信じて、かの土にしてさとりをばひらくと、ならひさふらふとこそ、故聖人のおほせにはさふらひしか」と受けられてゐる。このこゝろもちは、この親鸞は御師匠さまから、本願のお助けにまるまかせさして頂くのが、念佛往生のこゝろであると、承はつてゐるといふほどの意味である、これ卽ち親鸞聖人の信心往生の法義であつて、いまの「信」のこゝろに外ならぬ。換言せば、本願のお救ひと、信じて（信心往生）稱ふる（念佛往生）のが、法然聖人の淨土宗であり、卽ち淨土眞宗であつて、行信は同一の事實につきての、二つの表現にすぎないのである。

四、 かやうに、法然聖人の念佛往生の意義を、凡夫が本願に救はれて、淨土に往生させて頂く以外にはないといふことを徹底せしめて、當時の教界の蒙を啓くのが、信卷の使命の一つであつたのである。それであるから法然聖人が、念佛往生であらはしたまふた法義を、親鸞聖人は信心往生であらはされたのは、對自性唯心の啓蒙運動であつたことが、この別序において明了になるのである。かくいへばとて、何も念佛往生の法義を、不完全であり、缺點があるといふ譯でないことは勿論である。約言すれば、念佛往生について、聖淨混濫せるものゝ、蒙を啓くのが目的であつたのである。而して猶ほ他の一つの目的は、その次に謂ゆる定散の自心にまよふて、金剛の眞信に昏きものゝ、蒙を啓くにあつたのである。これはどちらかといへば、前のやうな理智的なものでなく、情意を根底としたものである。故に「定散の自心」といはれる。定散といふ語は、善導大師が觀經を釋するに當つて用ひられたもので、同經に說かれてある十三の觀法（定喜）や、種々の修行法（散善）を總稱したもので、善導大師自から「定散の要門」（散善義三十一左）と名け、方便の宗教と斷じてゐられるのである。何故にそれが方便教であるかといふ理由を、善導大師は「佛の本願に望むるに」といはれ、念佛往生の本願からみると、念佛以外の

定散二善のやうな諸行往生は、ことゞ〳〵く、方便だと見ねばならないのである。すでにしば〳〵のべたやうに、念佛往生は、絶對他力の救濟に投托したすがたである、之に反して定散の要門は、自力心を離れ得ざるところに、方便といはるゝ根本理由があるのである。故に方便であるか、眞實であるかは、自力心の有るか無いかによるものといはねばならない。

五、 ところがいま、定散の自心といはれたのは、必ずしも、定散の諸行を修することばかりではなく、それと同じやうな心持ちのものをも、含むものであつて、すべて自力の信仰を總括してゐるのである。さういふ心で稱ふれば、たとへ念佛でも、方便の念佛になつて了ふのである。この念佛を宗祖は眞門の念佛と名けられるのである。そこで今、この定散心を以て稱ふる念佛(眞門)と、かの定散の諸行(要門)とは、どちらも法然聖人の謂ゆる念佛(弘願)と、はつきり區別があつて、決して混同せらるべきものではない。だから宗祖は要門と眞門とを化土卷に明し、弘願念佛を行卷に明されたのである。然るに弘願念佛の弘願念佛たるは、信と相卽して、信のまゝの顯現たるところに存するのである。もしも信のまゝの顯現でないやうな場合は、要門眞門の念佛になつてしまふのである。ところが當時の教界には、法然聖人の念佛を、さういふ風に解釋したり、自分もおのづから、さういふ念佛に墮してゐるものが、少なくなかつたから、彼等の蒙を啓き、法然聖人の念佛は、信と相卽す念佛であることを、あらはす必要があつたのである。信卷はかゝる必要から製述せられたものであつた。約言すれば、念佛について、眞(眞實)假(方便)混濫せるものゝ、蒙を啓かんがために信卷が製述せられたのであつた。

六、 已上のべたやうな二つの蒙、聖淨混濫と眞假混濫とに簡むで、純正な他力念佛が、行卷の行とせられるところの念佛であつた、さればこそ、「大行」と稱し、語を極めて讃美されたのである。而してその行は、本願投托の貌(すがた)で、卽ち信なのである。かやうに行はさながらに、信だといふ妥當性に拍車をかけたものは、當時の教界における、行への誤謬であつたことを述べられたのが別序の第二節である。かやうに一は對外的の啓蒙のため、一は對內的の啓蒙のために、この卷を製述せられたことがわかるのであるが、この二つを外的緣由とすれば、さらに次の第三節の表白は、內的の緣由である。この親鸞が頂かせてもらふた、他力の信心を告白するのである、卽ち御師匠さまの念佛往生の教に對して、第二節でのべたやうた色んな誤解が多い中に、この親鸞は釋尊の三經や、七高僧の論釋に導かれて、樹立することを得た、信心を告白するのが、この卷だといはれるのである。これによると已むに止まれぬから、この卷を書かれたことになつてゐるが、これは宗祖のこの場合に限らず、古聖の著述の殆んどすべての場合に共通するものであるから、矢張り第二節の外的理由が、當面の緣由であつたやうである。

第二章　信卷の特異性

聖道門にくらべて、淨土門は一層、傳統相承を重んずる宗教であるが、その淨土門の中で、眞宗は他の異流にくらべて、最もその色彩濃厚な宗教である。これ愚禿を標榜して立ちたまひし、宗祖以來の眞宗の特異性となつてゐるのである。かやうな眞宗において、しかも宗祖の御著(おん)において、いはゞ獨創的な、幾つかの、新らしき教義の闡揚せらるゝを見て、一往すこぶる奇異の感が起らぬでもないが、一歩退いて、その教義の内容を究むれば、かゝる教義の根底になる、教理や思想は、すでに夙に、經論釋の上にあつたものを、宗祖が教義として、組織集成せられたものであつたといふことを知るのである。この意味において、七高僧には七高僧で、御一人々々に、おの〳〵特異な教義があつたのである。さうしたことが、數ある淨土の祖師がたの中から、ことに七高僧をお選びになつた、一つの理由になつてゐるのであつて、正信偈の依釋段にそれがあらはれてゐる。もしそれ、我が宗祖の上で、さうした點を味はふならば、後にいたつてのぶるであらう（證卷の講讃の序論）如く、二つや三つではないのであるが、就中今の信卷は、この御書(おんしよ)の中でも、最も異彩を放てるものと申さねばならぬ。

第一節　信の獨立

一、まづ信卷そのものゝ存在といふことがらが、はや既に特異だといはねばならない。ぜんたいこの卷御製述の緣由が、前述の通りであつてみれば、是非とも必要な卷に相違はないが、他のいづれの宗旨においても、信は行の隨伴者であるか、さもなくば行をするものゝ用心であるかにすぎない地位のものを、教・行・證と肩背(かたせ)を並べて、堂々たる一法として、之を押し立てられたのである、それがすでに他のどの宗旨にも例がない上に、更に別序の意味からいへば、むしろ眞宗の眞宗たるは、全く信の如何によるものとし、信を以て眞宗を代表せしめやうとするほどの御見識である。かくまでに信を高調し、信の獨自性を認められた例は、全くこれまでのどのお祖師さまの中にもなかつたところでむしろ破天荒なことであつたと申してよいのである。之を元祖が、從來歲久しく、寓宗としてわづかに、聖道門の間に介在をして居つた念佛を、一個の淨土宗として、獨立せしめられた功績に、對比することができるのである。故に念佛の獨立を以て、法然聖人を淨土宗の開宗者と仰ぐと同じ理由により、私どもはこの卷を以て、信心の獨立を宣示したまふに親鸞聖人を、眞宗の開祖と仰ぐに、少しも躊躇するものでない。かくまでに重大意義を有つてゐるのがこの信卷である。

二、信の獨立といふのは、他の何ものゝ助力をも藉ることなく、唯だ信の一因で、往生の大事が決定するとい

ふことを意味するのである。そのことを、三一問答のところ（信本一七丁右）には、「涅槃の眞因は、たゞ信心を以てす」といはれたが、信卷の冒頭には、次のやうに嘆へられてある。

至心信樂之願　正定聚之機

謹んで往相の廻向を按ずるに、大信あり。大信心とは、すなはちこれ、長生不死の神方、欣淨厭穢の妙術、選擇廻向の直心、利他深廣の信樂、金剛不壞の眞心、易往無人の淨信、心光攝護の一心、希有最勝の大信、世間難信の捷徑、證大涅槃の眞因、極速圓融の白道、眞如一實の信海なり。

いまこの一句一語を細釋する暇はないが、あらゆる方面から、信心が往生淨土の正因であることを、嘆じたまふたものである。

三、そのことを先づ根本の第十八願の上で味はひたまふたのが、第一行（標擧の十一字）である。これによれば、第十八願を至心信樂の願となづけ、全く信心の願としたまふてある。然るに第十八願には、信心（至心・信樂・欲生）と稱名（乃至十念）とを、往生の因なるが如く誓ひたまふてある、にも拘はらず、稱名の側を見ずして、信心の側のみについて、「至心信樂の願」と名けられしものは、阿彌陀佛の願意は、信心往生にありと、味はひたまふたからである。之れは本願の文面から見ても、稱名には「乃至十念」とあつて、不定の意をあらはしてある、もしも往生の果を招くところの、必須的要件であるならば、一なら一、十なら十、百なら百、千萬なら千萬等の、確定した數があげられてなければならぬ道理である。然るに不定を意味する「乃至」の字を、冠せられたこと自體から考へてみると、稱名は自由意思の表示であつて、往生の果を決定する因は、至心信樂欲生の三信であることがわかるのである。さうしてみると、信の獨立は、本願の上に既に宣示したまひしところを、宗祖がさながらに戴きたまふたまでゝ、もとより宗祖の私見ではなかつた、それをあらはしたまふたのが、この標擧の意味である。

四、往生の正因が、信心一つであるといふことは、本願の文にあらはれた、妥當性（だたうせい）によるのであつて、いはゞ願主でまします如來が、お定めになつたことなのである。而してその信心といふのは、かうなつたのが信心だとか、あゝなつたのが信心だといつたやうな、或る特別な心理狀態を認めて、それを押へて信心だと想ひ定むるのではない、後に三心一心のところでのべやうと思ふが、如來の絶對のお力に、まる任せのところを、信心と稱するのである、いはゞ無我投托のほかはないのである。であるにも拘らず、何か一つ手ごたへのある心持ちになりたいと思ふたり、まかせるだけでは物足りないと思ふて、いろんな行などを運んだり、するやうな考へになりたがるのであるが、それらは未だ如來の絶對のお力を、正當にうけ容れない徒（不定聚の機）、もしくは穿き違へてゐる輩（邪定聚の機）である。この二つは、すでにのべ了つた別序の、第二段の中の「定散の心に迷ふて、金剛の眞信に昏き」の徒輩で、淨土眞宗の範圍外のものである。いま信の卷は、謂ゆる「金剛の眞信」を明すので

ある。それは如來の絶對のお力を、全的にうけ容れ、無我に投托することであるところを、細註して「正定聚の機」といはれたものである。しかれば第一行の十一字は、如來と衆生とが、とろけ合つた境地をあらはして、この卷一卷のあらはすところが、かゝる信心に外ならないといふことを、先づ卷の初頭において、標したまふたものである。

第二節　絶對の信

一、通佛教の解釋では、信の心理を「澄淨」としてある。これは入阿毘達磨論の上卷や、俱舍論の第四や、唯識論の第六等の解釋が根本となつて、さうなつたものである。十住毘婆沙論の第二十九には、不染汚の愛を信だといつてあるが、不染汚の愛とは、求むるところなき愛であるから、眞宗の信に彷彿たるものがある。而して信が佛果菩提に對する役割りは、六十華嚴經第六に「信を道元功德の母となす、一切の諸の善法を增長し、一切の諸の疑惑を除滅し、無上道を示現し開發す。淨信は垢を離れ、心堅固なり、憍慢を滅除し、恭敬の本たり、信はこれ寶藏第一の法なり。淸淨の手となりて衆行を受く、信はよく諸の染着を捨離す、信は微妙甚深の法を解す、信よく轉勝して、衆善を成ず、究竟してかならず、如來の處に至る」といはれ、大智度論の第一に「佛法の大海には、信を能入となす」といはれ、求道の初門、修行の第一歩とするのである。故に信がなくては、佛果を招來することは出來ぬけれども、まさしく招果の因となるものは、行である、その行が進めば進むほど、信も亦た深められて行くやうな、信にすぎないのである。それだから信をよほど高調しても、行と信と相緣つて、證果を招くことができる、といふ程度を超えることはできないから、到底信の獨自性などが、問題にならう筈はないのである。

二、然るに阿彌陀佛の信仰においては、信が著るしく高調される反面に、行の影が非常に薄くなり、つゐに全く行の存在を認めないところまで到達したのが、親鸞聖人の唯信獨達の、信卷の眞面目である。さうした思想は、すでに、大經の第十八願文にあらはれてゐることは、上にのべをはつたとほりである。宗祖はこの願文のこゝろを、一層明確にするために、成就文をお引きになつてゐる。しかもその成就文に、正依の大經の外、異譯の如來會の成就文をお引きになつてゐるが、彼の文には、行の隻影だも認めないのである。宗祖が唯信獨達を力說せらるゝ、經典の根據は、この如來會の成就文であると、見らるべき理由がある。それから又、大經胎化段においては、胎生（方便化土往生）の因を、佛智疑惑に在りといましめ、大利を失ふものだと歎じ給ふてゐる。之に反して、明かに佛智を信ずるものは、化生（眞實報土往生）の大利を得るものだと、勸讚したまふ佛意である。これに依つて龍樹菩薩の易行品には「疑へば則ち華ひらけず、信心淸淨なるものは、華ひらいて則ち佛を見たてまつる」と、信疑を決判せられたのである。さきに引いた華嚴經の第六の文や、智度論第一にいはゆる信とは、天

淵の差がある。智度論の如きは、おなじ龍樹菩薩の著であるけれども、通佛教の信であつて、これ一つで結果を定めて了ふといふやうな、重大意義をもつた信ではなかつたのであるが、その龍樹が、易行品では、全く別人ではないかと思はるゝほどに、信を高調せられたのである。それは大經の始(本願)中(成就文)終(胎化段)に一貫せる、信の重大意義に着眼せられたからであることは云ふまでもない。

三、かやうに阿彌陀佛の信仰に關する限り、斷然信の卓越性があらはれてゐるから、七高僧の第七祖として、しかも念佛の獨立を宣示せられたほどの法然聖人ですらも、選擇集の第八章には、

生死の家には、疑をもつて所止となし、涅槃の城には、信をもつて能入となす。

と斷じたまふてある。このお釋は、彼の大經や易行品の結論を示されたものゝやうである。私は、この結論が出てゐる三心章を、選擇集における信卷だと見て、念佛往生を高調せらるゝ彼書における、特異な存在だと思ふのであるが、それは丁度信心正因を力說せらるゝこの御書における、行卷が、特異な存在であると、同じやうな意義において、いづれも甚だ有り難いことだといはざるを得ない。行卷の存在意義は、すでに屢述したところにゆづるとして、選擇集における三心章の存在意義は、決して念佛の準備行爲や、用心ぐらゐな話しではない、信心になりきつて了ひさへすれば、たしかに往生決定との確信を示されたものである。そのことは、いまの信疑決判前に善導大師の語(散善義四丁右)を引いて「深信とは、いはく、深く信ずるの信なり」といはれてあるが、いはゆる「深く信ずる」とは、信になり切つて了ふことである。信で行かうか、行で行かうかといつたやうな、不徹底な態度であつてはならない。そんな相對的な態度を超えて、明信佛智の絶對的な態度になつたならば、本願力のお救ひと落着くより外はないのである。その心持は念佛爲本の心境とも一致するのである。それゆへに法然上人においては、念佛往生のまゝが、信疑決判であり、信疑決判のまゝが、念佛往生であつた、卽ち行・信は相卽であつたことがわかるのである。他の者から、行だ、信だとさわぎまはるやうな、相對的なものではなかつた、さながら斯の御書の行・信となつたから、この御書をもつて、選擇集を解くの書だと見た古來の說は、決して誣ゆるものではない。元祖の建て前は、淨土宗初開の師として、念佛になりきつて了つた念佛で標榜し、宗祖の建て前は、別序に示されたやうな、啓蒙運動といつたやうな外的緣由も手傳つて、信心になり切つた信心で標榜せられたものである。

四、かやうな信心であるから、信は行に對する信ではない、行だの信だのといふ、相對的態度を超えた、絶對の信である。その絶對の貌は三一問答にあらはれ、信一念釋に反映し、作用にいたつては、現當二世の大益を感ずるのである。卽ち信卷は、絶對信の貌の卷である。その貌の裡に體そのものを、おのづから攝むことをうるやうに解かれてある。

第三章　信卷の組織

如何なる名論卓說でも、傳統相承を背景としなければ、一個の私見にすぎないとして、價値を認めざる眞宗においては、その傳統相承の根底に、佛典の基礎がないと、まだ充分な確かさを缺ぐものとはいはねばならぬ。そこで斯の御書一卷々々には、必ず先づ經說を引證して、順次に三國祖師の論釋におよんでゐる。いまこの卷も、もとよりその例に倣はれてあるが、しかも亦おのづから別な趣があるやうにうかゞはれる。以下本文を辿つて、之を味はつてみやうと思ふ。

第一節　前後二編

一、それは全卷を信一念釋(末一丁)のところで折半して、前は第十八願文、殊に三信の信體及び信相に就いての詳釋であり、後は同願の成就文、とり分け「卽得往生住不退轉」の、信益に就いての詳釋となつてゐる。卽ち一卷を前後兩編に分ちて見れば、前編は本願編であり、三信編であり、信體及信相の編である、後編は成就編であり、信益編、ことに現益編である。又、人に約すれば、前編は願王彌陀編にして、後編は敎主釋迦編である。

丁度別序の第一節に「如來選擇の願心」・「大聖矜哀の善巧」と、いはれたものに對應して、二編が分たれてゐるやうである。

二、宗祖御眞筆の御草稿本を始め、高田本・本願寺本の兩御淸書本にも、本末を分けてないのを、存覺上人が、六要鈔をお書きになるにあたり、信一念釋から前を本とし、その後を末として、兩卷に分ちて解釋されたのも、まことに最もなことで、爾來、信卷には本末兩卷を分たれてゐるのであるが、私は今、所依の御文に從つて、本卷を本願編とし、末卷を成就編とし、先づ二編の基礎となる、願文と成就文の概要をうかゞひ、且つ二編の內容を一瞥しやう。

第二節　本願編

一、本卷の初頭の御引文は、正依(魏譯)と異譯(如來會)との第十八願文で、その次に又、兩經の成就文が引かれてある。この成就文は助顯で、願文が基礎であることは、云ふまでもない。ところが本願の文には、種々の內容を含むでゐるが、本卷では、殆んど三信に限定され、之を微細に說かれたまでゞある。これは五願六法を分けられた、宗祖の立ち場としては、すこぶる當前なことゝ申さねばならぬ。

願文(原漢文)　　和譯(本願寺本御淸書本による)

設我得佛　たとへ我佛をえたらむに……願主
十方衆生　十方の衆生……所被
至心信樂欲生我國　心を至し信樂して我國に生せむとおもふ……信心
乃至十念　乃至十念せむ……稱名
若不生者不取正覺　もし生ぜずば正覺を取らじと……往生
唯除五逆誹謗正法　唯五逆と誹謗正法とを除くと……抑止

（稱名―信心―因；往生―果―攝取）

この中、信心を中心として、本願三心の願・至心信樂の願・往相信心の願と呼ばれたのが宗祖であり、稱名を中心として、念佛往生の願・選擇本願と名けられたのが、法然上人であつた。信心の願とした場合、稱名は、信の必然性であるから「眞實の信心は、必ず名號を具す、」（信本二九丁左）といはれ、往生の果を招く全力を、信の一つに歸して了ふのである。

二、信に具はつた稱名の必然性とは、信は稱名となつて、躍動すべきものであるといふ意味である。然るに躍動する遑のないやうな場合も、豫想しうるのであつて、觀經下中品の聞己卽滅の機は、まさしくそれなのであるが、彼れも亦た往生を得たといはれてある。されば稱名は、信の必然性ではあるが、往生の必須的要件にはならないことも、おのづから明かである。願文の次に引かれた成就文の中、異譯の成就文には、その意味があらはれてゐる。

無量壽如來會に言く、他方佛國の所有の有情、無量壽如來の名號を聞て、一念の淨信を發して歡喜せしむ、所有の善根廻向したまへるを愛樂して、無量壽國に生ぜんと願せば、願に隨てみな、不退轉乃至無上正等菩提を得んと。

この御文は、稱名の行の隻影をとゞめず、眞に信心正因の意義があらはれてゐるから、助顯として引用せられたものである。其の外七高僧の御釋等から、信心正因に關する御文を引き、特に善導大師の散善義（二丁左―一二丁左）の三心釋をながゝと引用し、あたかも願文を解するに、善導大師を以てせられたやうになつてゐる、その中に二種深信のお釋や、二河白道のお譬も出てゐるのである。

三、次に來る三一問答（信本一七丁右已下）においては、三信とは、眞實の一心に外ならないことをあらはされてある、問答が二つあつて、初の問答では、三信一心といふ、信の相について明し、後の問答（信本一八丁右已下）では、衆生の三信（末）卽ち、如來の三信（本）の廻向であつて、佛心の顯現であるから、眞實ともいはれ、三卽一でもありうるといふことを明された、信の體又は相に關する解釋である。だが、この三一問答の前後兩問答を概觀すれば、他力を體とする信の、絕對性をあらはしたまふのが、本旨のやうであるから、信相よりも、信體を明されたものと見てよいやうである。之れに對して、三一問答前の、諸の經釋の御引文は、信の體に關するのもあれば、相に關するのもあり、用に關するものも出でゝ居るから、「信とは何ぞや」といふ、總論であつ

たと見ることができる。而して末卷は、概して信の用をあらはされたものであるやうだ。即ち

一、信とは何ぞや（總論）　三一問答迄（信本一――一六丁）
二、信　體　論（相をも含む）　三一問答（同一七丁――三一丁）
三、信　用　論（現生不退）　末　卷（一丁――三七丁左）

となつて、一と二は前編、第三が後編である。

第三節　成　就　編

一、末の卷初頭の信一念釋から、成就文によられた信用論である、釋迦の教導に關するものと見てよろしい。こゝに引かれた成就文は（二文共重出）

大經にのたまはく、諸有衆生、その名號を聞て、信心歡喜せむこと、乃至一念せむ、至心に廻向したまへり、彼の國に生せんと願ずれば、即ち往生を得、不退轉に住せむと、（已上正依大經の文）
又、他方佛國の所有の衆生、無量壽如來の名號を聞て、能く一念の淨信を發して、歡喜愛樂せむと、のたまへり（已上異譯如來會の文）

である。この兩經成就文の御引文は、前に一言したやうに、稱名の隻影をもとゞめざることを、立證せんとせられたことは勿論である。正依の方の御文に「乃至一念せむ」といふのは、稱名を少くとも一聲だけは、稱へなければならないかの如く見ゆるけれども、如來會の方の御引文で、その然らざることを助顯し、一念といふのは、信の一念であることを、定められたのである。それが、この二つの御引文の前に出てゝゐる、信一念のお釋である。いはく

それ、眞實の信樂を按ずるに、信樂に一念あり、一念とはこれ、信樂開發の、時尅の極促をあらはし、廣大難思の慶心をあらはすなり（信末一丁右）

二、信一念のお釋は、信卷の名所の一つであるから、前の三信のお釋と共に、後に改めてのぶるであらふが、兎もかく、信の一念の立ちどころに、往生が決定し、その後は御報謝の生活に入らせていたゞくのである。之を成就文にいはゆる、「即得往生住不退轉」の八字のこゝろなりとする。その位における利益を（信末二丁右）に明して

金剛の眞心を獲得するものは、横に五趣八難の道を超え（當益）、現生に必ず十種の益（現益）を獲る

といはれ、先づ現益の方から、いはゆる十種の益（信末二丁右）をあげてあるが、これは種々無量の益を、しばらく十種であらはされたものと味はれる。それから次に「金剛の眞心」とは、如何なる信心であるかといふことを、宗祖の筆法の一つの特色ともいふべき、疊語法（二丁左―三丁右）であらはされてゐるが、こゝで特に注意

すべきは、願作佛心（自利）と度衆生心（利他）といふ解釋である。これは信心そのものゝ、本然性として具有してゐる、二利の德をあらはされたもので、かゝる信德を具するところに、佛果菩提に到ることのできる、菩提心たる道理があるとせられてゐるが、この願作佛心・度衆生心・菩提心は、七高僧の第二祖、天親菩薩の御指南によるものであるから、高僧和讃の天親章には

願作佛の心はこれ　度衆生のこゝろなり
度衆生の心はこれ　利他眞實の信心なり。
信心すなはち一心なり　一心すなはち金剛心
金剛心は菩提心　この心すなはち他力なり。

といはれてあるのに對照して味ふてみると、他力を體とする一心といふ信相をもつた信心の、信用をあらはすもので、體・相・用の三が不可分ではあるが、いまこゝ（信末三丁右）では、その信用をあらはさるゝのが主眼であらふ。

三、そこで次に横超の釋が出でゝ來る（信末四丁右）のである。これは前に「横に五趣八難の道を超え」とあつたものゝ解釋であるが、自利々他圓滿の菩提心なるがゆへに、この信用があるといはれるので、やはり信用論である。已上の如き信用論の目的とするこゝろは、畢竟、一念發起の立ちどころに、往生決定して、正定聚の益をうる所以の、理論的說明である。直ちに佛となるのではない。佛となりうる因が與へられて、佛となるべき人となつたのである。かやうに佛となるべき人と、佛とは、眞宗においては、明確に區別せられ、前者を正定聚、後者を滅度と名づけ、信末の一卷は、佛となりうる信心（信用論）なること、及び佛となりうる人（正定聚）についてのお釋である。特に眞佛弟子の釋（信末六丁右）から後は、佛となりうる人に關するもので、量においては勿論であるが、質においても、この後編の中心は、この眞佛弟子であるやうにうかゞはれる。その下には、大經の第三十三觸光柔輭の願文をはぢめ、二十一文（信末六丁右―一一丁左）が引かれてある。之れみな、佛となりうる人の、享受する利益に關するもので、前の現生十益の何れかに、配當せらるべきものである。次に（一一丁左）かくの如き眞佛弟子を、彌勒菩薩と等同なりと絕讚し、遽かに筆を轉じて（一二丁右末已下）不信無信の機を悲憐せられてあるが、これまた文勢より見て眞佛弟子釋下のものである。

四、而して次に（一三丁右）涅槃經の現病品・梵行品・迦葉品からの御引文が二十五枚（信末一三右―三七丁左）の長きに亘つてゐる。大體において、第二の梵行品所說の、阿闍世太子の廻心が中心で、かの極惡闍世の廻心の裏に躍動してゐる、佛力の偉大さを、讚嘆せらるゝと共に、彌陀法の正客としての惡人凡夫が、上來述べたやうな、絕大な信益にあづかることの、不可思議の强緣をたゝへらるゝ思召であるやうだ。なほ最後の一段（信末三七丁左）には、本願にも成就文にも出でたる、唯除五逆誹謗正法の抑止八字の意義を、曇鸞大師の論註のお

釋を中心として解かれてあるが、これ尊號眞像銘文（三二丁）に「この二つの罪のふかきことをしめして、十方一切の衆生みなもれず、往生すべしと、しらせんとなり」といはれたものと同意で、本願編成就編に共通し、彌陀の本願と、釋迦の教導の正客が、かくの如き極重惡人であり、かゝるどん底の衆生が、上來兩編にのべたる他力の大信心で、現當の兩益をうるといふ、ことをしめされたものである。前編における散善義御引文中の、二河白道の譬喩にあらはれた西に向つて行かんとする旅人や、後編における涅槃經御引文中の阿闍世太子や、今の逆謗二罪の人の上に、宗祖自からの機を味はひたまふたものである。

第四章　信卷の要所（一）

――原理と總說――

信卷の本末兩編の大體の組織が、本の方は、大信の體と相とをあらはし、末の方は、その用を明したまふたとのべておいた。いまそれにもとづいて、內容の要所を拾つて、うかゞふことにするであらう。矢張り順序を追ふて始めから行くことにしやう。ところが玆に、前もつてのべておきたいことは、これと行卷との關係といふことにもなつて、前の第一章で味はつても、よいのであつたが、いまそれが內容のすべてに、關係をもつといふところから、こゝでのべた方がよいと考へるのであるが、かの行卷の追釋要義といふあの四十丁左の、「他力といふは、如來の本願力なり」から後の、謂ゆる一、他力章（四〇丁左―四四丁左）・二、一乘海章（四四丁左―四七丁左）・三、敎機章（四七丁左―四八丁左）・四、二十八譬喩章（四八丁左―五〇丁右）・五、正信偈（五〇右已下）の五章の全體、就中、「行の哲學」と名けて、行卷の講讀において味はつた一乘海釋を、さらに一度同顧してみたいと思ふのである。

第一節　信の哲學

一　行卷の追釋要義の最終の正信偈は、在り場所は、行卷の中ではあるが、信卷にも跨る意味があると見ることには、古來先輩の意見が一致してゐるのである。之を承上起下と申して、あだかも蝶番の役目を演ずるの一段だと、見られてゐるのである。ところが私は、さらに溯りて、かの追釋要義の五章の全體を以て、承上起下の役目を演ずる章段であると味はひたいのである。その譯は、この五章は、初めの他力章冒頭にいはれたやうに「他力」をのべらるゝ所で、前に明したまふた大行の、よつて來る根源を示したまふのである。而してその根源を、佛教最高の哲理を以て、解きたまふたのが次の一乘海章で、之を「行の哲學」と名けて、解き了つたのである。その行の哲學は、單なる理談ではない、それを次に絕對不二の教・絕對不二の機といはれてある。教の方は、教義の教とは異つて、矢張り大行のことであり、機の方はいふまでもなく、大信のことである。故にかゝる行・信の哲理を談ずるのが、一乘海釋であるから、私は「行の哲學」だと云つたのは、行卷に据つていつたのであるが、信卷から申すと、一乘海釋は「信の哲學」でもあり得るのである。かく行・信の哲學だといふ意味は、即ち他力念佛・他力信心の原理を、解きたまふといふ意味である。

二　かくの如く一乘海釋を「信の哲學」として味はつてみると、信卷の隨所、殊に要所において、この卷に明すところの信心は、眞如法性の如實顯現にまします、如來の御心をもつて、體とするといふことが、云ひあらはされてゐるのである。衆生の方に、大信といつたやうな、立派な信心のあらう道理はないのである。たゞこれ佛心の顯現でなくてはならない。即ちいまの大信の體は、佛心である。而してその佛心は、眞如法性の如實顯現であつて、信心の體の、またその體をあらはすところの、眞如一實（信本二丁左）だとか、圓融無碍（同一八丁左・二一丁右）だとか、一切衆生悉有佛性（同二二丁左）だとか、本願一實（同二九丁右）だとか、一實圓滿（信末四丁右）だとかいふ語を以てせられてある。是等の語は、かの行卷に眞如一實（一丁右）、一乘・法身・實諦・一道・悉有佛性等（四四丁左―四五丁左）といはれたものと同じやうに、他力廻向の根本原理をあらはすところのもので、行卷の場合は「行の哲學」といふべく、信卷の場合は「信の哲學」といふべきものである。

三　信心の他力廻向なることは、もちろんであるが、どういふ譯で、如來の信心が、衆生の信心となりうるであらふか、そういふことを、他作自受と稱して、昔からわが他力教の重大問題とし、いろ〳〵に論究されてゐる。この事は、如來の行を廻向されて、衆生の行とさせていたゞくといふ場合にも、同じやうに問題になるのである。又結果の上からいつても、淨土へ往生させて頂くといふことが、どうして他力で能るか、といふことも問題になるのであるが、就中、もつとも根本的であり、而も純精神的である、信心の場合において、もつとも問題になる可能性がある。そこで信の總論の終つた最後に（信本一六丁左）

しかれば、若は行、若は信、一事として、阿彌陀如來の、清淨願心の、廻向成就したまふところに、あらざることあることなし。因なくして、他の因のあるには、あらざるなり、知るべし。

とあり、信心の他力廻向といふことには、しかるべき道理が、基礎づけてゐることを示したまふてある。

四　因果の必然性は、宇宙の森羅萬象の緣起を說く場合の、必須的論法とされてゐるけれども、萬法の根本原理たる眞如法性は、因果法ではない、因果律の說明範圍を超えた超因果法なのである。故に因果律といふものには、適用の限界があつて、宇宙の本質といつたやうな世界に行くと、因果律のごときは、無用の閑葛藤になつて了ふのである。卽ちもうあらゆる論理で、說明をすることができなくなつて來る。しかし說明のできぬ世界であるといふことが解るのは、あらゆる說明をし、あらゆる論理を、あてがつてみた上で、初めて解るのであつて、はじめから解らぬといつて了つては、その境地を知るといふことは、勿論できる譯ではないのである。卽ち因果律を辿つて行きて、超因果律の境に達するのである。そこが、無因果と超因果との相異で、自然（じねん）外道のやうな、亂暴な考と、一乘敎の眞如談とは、全く天淵の差があるから、混同してはならないのであるが、眞如の世界は、絕對不可知の境だといふことだけは、一乘敎の通談である。

五　超因果の世界に行くと、萬有無差別、萬法一如と達するのである、あらゆるものゝ上に、不可分離の關係がある譯であるから、かゝる理性を實證したまふた如來には、十方衆生の救濟が、決して不可能ではない。卽ち因果法を超越した、眞如法性を實證したまふた如來は、因果法を超越して、一切衆生を平等に救ひたまふのである。はじめは因果法に順應して、發願修行したまふたが、修行の曉に、到達したまふた境地は、超因果であつた。かゝる超因果の世界に、一切衆生をして證入せしむるが、如來の本願であるけれども、そこに到達する過程は、因果法に順應するの要があるから、「涅槃の眞因は、唯信心を以てす」（信本一七丁右）といふ、因果法で行くのである。この場合、その信心を廻向さるゝといふことが、他作自受になるといふ非難については、これ亦た、因果律の頭をもつて、超因果の世界を非議するもので、敢へて問題とするには足らないのである。何となれば、衆生と佛とは、もとより萬法一如の理により、體性において、無差別である、迷妄のためのゆへに、一如の體性を遠かり、全く迷妄となり了つてゐる、如來は然らず、一如に順應し、通達し、活ける一如であり、眞如の完全な具體現であつて、いはゞ衆生に信心を廻向し得るやうに出來てゐるのである。之を同體の大悲といふのである、而して衆生、たとへ廻向せられた信心であつても、廻向にあづかつた以上は、自己のものであるから、他因自果を成じないのである。

六　他力の信の成立する哲理は、萬法一如の理法に基礎づけられてゐることを、以上のごとく味つてみると、信卷の信心論の根基として、行卷の一乘海釋の意義は、すこぶる重大である。これが初めの方の總論の根基にもなり、次の（信本一七丁右已下）信體・信相論の根基にもなり、末卷の中心問題たる信益論の根基にもなるので

ある。即ち一實眞如の理に基礎づけられてゐる信の體・相・用なのである。

第二節　信の總編

一　本の卷の冒頭に、大信に關して、十二句の莊重幽美なる語句を列ねたまふた（一四頁所引）中、初めの二句は、眞實に生きる道、理想鄉建設の方法だといふやうな、信の一般的意義に關する讃美であるが、第三句は、如來が本願を發して、選びに擇びたまふた至純な心、第四句は、深く大きな、如來の御心に根底をもつた信心、第五句は、金剛石のやうに堅く貴い御心だといはれたもので、是等の三句はいづれも、信を體（ものがら）の上から讃美せられた。第六句は、大經の說により、第七句は、觀經の意により、第八句は、小經のこゝろにより、共に信の相に關する讃美である。第九句は、世間法に比し、第十句は、通佛敎に約し、第十一句は、一乘敎の立場から、信の用についての讃美である。而して第十二句は、信の本質論であることは、前章にのべたところである。已上の通りであるから、信の總論は總論にちがひないが、どつちかといはゞ、猶ほ外廓的・客觀的なものといふを得べく、もし、より內部的・主觀的なものを求むるならば、左の御文である。

二　行卷と對照するならば、それは冒頭の出體釋に相當するものと、見ることができるのである。先づ初め信心正因の意をあらはして、次に體・相・用にかけて讃美せらる。（信本一二丁左）

しかるに常沒の凡愚、流轉の群生、無上の妙果成じがたきにはあらず、眞實の信樂實に獲ること難し。」何をもつてのゆへに、乃（まし）、如來の加威力によるがゆへなり、ひろく、大悲廣惠の力によつてのゆへなり。」たま〳〵淨信を獲ば、この心顚倒せず、この心虛僞ならず。」

こゝを以て、極惡深重の衆生、大慶喜心をえ、もろ〳〵の聖尊の、重愛を獲るなり。」

しばらく四節に分ちて味へば、第一節は涅槃の眞因はたゞ信心を以てするの意で、第二節は、信の體の他力廻向なること、第三節は、信の相の淳眞にして、自力を離れた狀態。第四節の、極惡深重は、卷末の唯除逆謗に對應し、大慶喜心が、卷初の信一念釋に對應し、聖尊重愛が、佛弟子等に對應し、一節の內に信末の全編を攝めて、信の用をのべられたものである。故にこの四節の嘆釋は、信卷本末の內容を、あらかじめ略してお釋しになつたものとうかゞはれる。

三　正依や異譯の大經（三丁右）の第十八願文・成就文を引かれたるを始めとし、次に（四丁左）曇鸞大師の論註・讃阿彌陀佛偈、善導大師の（五丁左）定善義・序分義・散善義・往生禮讃、源信和尙の往生要集（一六丁右）から、諸文を引用して後、「しかれば若は行、若は信」等の嘆釋の御文（前節所引參照）を以て、總論のお釋は終つてゐるのであるが、この最後の一節に、「若は行・若は信」とが、どういふものであらふか、いまは信卷における信の結嘆であるのに、何がゆへに、特に行をも加へられたのであらふか、これについて私は、これま

でしば〳〵のべ來つたやうに、行卷の行と、信卷の信とは、相卽不二なることを示すところの、一つの有力な文證だとうかゞふのである。元祖でいはゞ念佛往生義、宗祖でいはゞ信心正因義の關係を相卽不二であると見た上からは、かの念佛も絶對他力、この信心も絶對他力、たゞ相異點をいはゞ、口頭の顯現が念佛で、精神上の事實が信心である。若し念佛往生義によらば、信心は念佛の根基であり、信心正因義によらば、稱名は信心の等流相續である、一體の二相、靜動の異なるのみ、これこゝに行・信を並べ奬じたまふたものゝやうである。

第五章　信卷の要所（二）

――體と相――

信卷の本の方では、何と申しても、三心一心の問答の章が中心である。ところがこの問答には、前後二問答があり、何れも三心をもつて、一心を難ずるといふ形式であるが、問答の內容や、あらはさんとするところには、おのづから別なものがあるから、篤と吟味する必要がある。

第一節　三一問答章要旨

一　第一問答（信本一七丁右）では、本願の三信と、天親菩薩の一心とは、相異するけれども、畢竟同じものであるといふ譯を、三信を据りとして、一心を難ずるの形式であらはされてある。之に答ふるに、合三爲一（がつさんゐいち）といふ語を以てし、三信を合して、一心となしうる道理があつて、かくなつたものであると答へられてある。謂ゆる道理とは、何であるかといふに、字訓（じくん）、すなはち言葉にあらはれてゐる、意義を通じて、三信が一心になる譯を解いてゐられる。

- 至心
  - 至　眞也・實也・誠也
  - 心　種也・實也
    - 眞實誠種の心
      - 信　眞也・實也・誠也・滿也・極也・成也
      - 用也・重也・審也・驗也・宣也・忠也
      - 眞實誠滿心・極成圓重の心・審驗宣忠の心・欲願愛悅の心・歡喜賀慶の心
- 信樂
  - 樂　欲也・願也・愛也・悅也・歡也・喜也
  - 賀也・慶也
- 欲生
  - 欲　願也・樂也・覺也・知也
  - 生　成也・作也・爲也・興也
    - 願樂覺知の心・成作爲興の心

疑蓋無雜

字訓の一々について、解くの遑はないが、三信の一々に、無疑（疑蓋無雜）といふ意義があるから、三信は無疑の一心に外ならないのである。されば論主が、三を合して一とし一心で統一されたものであると、斷定したまふのである。

二　ところが、この無疑といふことは、實は信樂當面の義である、從つて三信おの〳〵、無疑なるがゆへに、一心だといふことゝなるは、三信はどれもが、信樂に統一さるゝ、といふ意味になるのである。さうしてみると、三

信の中で、信樂だけは、特別な地位を保つてゐると、解さなければならぬやうだが、果してそれで差支がないのであらふか、之れについて、信樂には、特殊的地位を與へてよろしいといふことに、古來先輩の意見は、ほゞ一致してゐるやうである。それは左の文を据りとして申すのである。

眞知、疑蓋間雜なきがゆへに、是を信樂となづく、信樂はすなはち一心なり、一心はすなはちこれ、眞實の信心なり。

信樂を以て、一心・信心などの異名であるといはれてをるからである。

三　さてかやうに、信樂を以て統一するとき、その信樂は、三信中の一心としての信樂であるか、はた又、三信のどれもにある無疑の義を、總括的に信樂と呼ぶのであるか、いづれも、無疑は無疑であるけれども、三信を都べた信樂と、三信隨一の信樂とは、おのづから異なつた意味があるやうである。卽ち前者を都名信樂とし、後者を別取信樂とする、之れについて、隨分先輩の中には議論もあり、一時、都名家と別取家とが、大なる確執を、たゝかはしたこともあるけれども、さうした爭ひは、もとより三信の、機構形式上の問題でなく、內容實質の、檢討に俟たねば、率爾に決する譯には行かないのである。そこで、本願の三信に立ち歸り、三信の名目の出でた、第十八願文において、三信とは果して、如何なる精神現象をいふのであるか、といふことからして、三信を本末に分ちて、根本的に檢討せられたのが、第二問答である。

四　第二問答（信本一八丁石）でも、三信を以て、一心を難ずるの形式においては、第一問答と異りはない。たゞ、第一問答は、願文と論主との、異同を吟味するのが、重點であつたけれども、第二問答は、願文自體の上で、果して三信が、一心に合してよい、可能性があるのであるか、といふことを解くのである。その答への要點をいへば、三信はそのまゝ、無疑一心だから、合三爲一は、三信自體の上から、可能性があるとなすのである。之を三信卽一と申すのである。而して卽一といふことを、究めて行くうちに、どうしても、三信を根本的に考察し、如來と衆生との關係に及び、如來の三信が、衆生の三信になるのであるから、本（如來）の三信に、一心といふ義がありさへすれば、末（衆生）の三信に、一心といふ義は、當前ありうる筈なのであると、三信本末の問題へ展開して、はぢめて三信卽一の問題が、立派に解決さるゝのである。合三爲一でも、三心卽一でも、體・相・用の三大の中では、相の問題であると見た方が、親しいのであるが、この相を吟味するには、體から吟味しなければならぬ、それが本末問題である。依つて第二問答では、或時は相、或時は體と、互ひに入り交り、なか〳〵込み入つたお釋になつて居るのでめる。

第二章　信　體　論

一　三二問答の第二では、三信におの〳〵無疑の義があるから、三信卽一になるといふ譯を解くについて、三信を根本的に吟味し、如來と衆生との關係へ、展開して來たのである。すなはち、三信卽一の相の說明から、三信の體に歸納された譯である。そこでこの體が解れば、演繹して、相はおのづから解る次第である。從つて第一問答は、合三爲一といふ、相のみの說明であつたが、あの說明も矢張り、この體が明らかになつたとき、徹底して來るのである。元來、信心といへば、衆生の精神現象であつて、主觀的の問題である。第十八願において、如來が正因として、信心を誓約したまひ、至心・信樂・欲生の三信を、往生の因とすることを、誓ひたまふたのは、衆生が往生する因法であるから、卽ち衆生の信心でなくてはならない。ところが、如來の本願の誓意をうかゞふてみると、どの本願でも、衆生のための本願でないものはない、衆生のために、本願を發したまひ、一々、行にかけて、修しあらはし、以て成就するところのものを、衆生に廻向したまふのである。この事は天親菩薩の往生論の、願心莊嚴の思召を、往生論註に曇鸞大師が、こまゝ〳〵と釋したまひ、衆生往生の因も果も、こと〴〵く、如來より廻向せらるゝの義を、解いて下されてゐるのである。親鸞聖人の敎義の、機構や思想背景として、もつとも影響の大なりしは、曇鸞大師であつた。いま三信本末論も、さながらに曇鸞大師を、相承したまふたものである。

二　いま第二問答の下において、至心・信樂・欲生の三信を解したまふにあたり、いつも如來の至心、如來の信樂、如來の欲生を說くのを先としたまふてある。而してその至心・信樂・欲生を、衆生に廻施したまふて、衆

生の三信を成ずることを、あらはしたまふた。

本（如來の三信）

至心　如來清淨の眞心を以て、圓融無碍不可思議不可稱不可說の至德を成就したまへり（信本一八丁左）

信樂　斯の心は、すなはち如來の大悲心なるがゆへに、必ず報土の正定の因を成ず（信本二二右）

欲生　すなはちこれ、如來、諸有の群生を招喚したまふ勅命なり、廻向心を首となして、大悲心を成就することを得たまへり（信本二六丁左）

かやうに、如來の至心より、衆生の至心を成じ、如來の信樂より、衆生の信樂を成じ、如來の欲生より、衆生の欲生を成じたまふとすれば、佛三生三の關係だと、いふやうなものである。ところが、すでに如來の至・信・欲の三信間において、實に微妙な關係がある、といふことを味はつてみると、佛三生三といふが如き、單調なものでは、ないことがわかるのである。

末（衆生の三信）

如來の至心を以て、諸有一切煩惱惡業邪智の群生海に廻施したまへり、卽ちこれ利他の眞心を彰はす（信本一八丁左）

無碍廣大の淨信を以て、諸有海に廻施したまへり、これを利他眞實の信心と名く（信本二二丁右）

利他眞實の欲生心を以て、諸有海に廻施したまへり、欲生はすなはち、これ廻向心なり、これすなはち大悲心なり（信本二七丁右）

三　別に、名號が、至心の體であり、至心が、信樂の體であり、信樂が、欲生の體であるといふ、關係をあらはしたまふた御文があつて、三重出體といはれてある。

至心　この至心は、すなはちこれ、至德の尊號を、その體となせるなり（信本一八丁左）

信樂　すなはち、利他廻向の至心を以て、信樂の體となせるなり（同二二丁右）

欲生　すなはち、眞實の信樂を以て、欲生の體となせるなり（同二六丁左）

こゝに體といふは、モノガラのことである。そこで此の三ケ所の御文の、意味を味ふてみると、欲生は信樂に體一、信樂は至心に體一、至心は名號に體一であるから、等しきものは、互ひに相等しきの道理によつて、三信は同一の名號が體で、いづれも名號をモノガラとなしてゐるのである。それでは、三信卽一といふのは、そのことであるかといふに、さうではない。やはり三つに分れた、相の上での卽一なのであるが、かうなると、それ〴〵疑蓋無雜（至心の無疑は一八丁左、信樂の無疑は二二丁左、欲生の無疑は二七丁右）といはれてあつて、この無疑のところで、三信卽一の義が成立するのである。

四　無義といふことは、三信の相になるから、後に至つてのぶるであらふが、今いつたやうに體一といふのは、名號に歸納した場合は、何にも三信とて、名號より外はないのである。而して至心で體一を談ずることもでき、信樂で體一を談ずることも出來、欲生で體一を談ずることも出來るのである。昔、欲生安心といふのがあつたが、

かれは、信樂や至心を排して、欲生の獨自性を發揮しやうとしたからで、いまのやうな心持ちとは、全く變つたものであつた。要するに如來の三信は、互ひ〳〵に融通無碍で、どの一つをとつても、他の二つと、體一を談ずることができるのである。それから機受の上でいつてみても、名號の領受が、信心であつて、その名號を體とするのが至心、その至心を體とするのが信樂、その信樂を體とするのが欲生で、矢張り三信を、名號に歸納しうるのである。從つて、衆生の三信相互の間にも、體一を談ずること、毫も如來の三信の場合と異ならない。爾ればし、如來の側で云つても、衆生の側でいつても、三信は、名號と體一であり、又、三信が相互ひに體一である。さうしてみれば、佛邊も、機受も、三信の中のどれか一つで澤山であらふ、といふことになるのである。しかし機受の側は、天親菩薩のやうに、總括的に一心であらはされた場合もあるが、佛邊では、三信を動ずることは出來ない、これ本願の所誓であるからである。

五　而して本願の所誓は、佛の智慧門(至心)・慈悲門(信樂)・方便門(欲生)・の三門を、象徴したまふたもので、曇鸞大師の論註（下二九—三〇丁）には、之を法藏菩薩の信心であつたとせられてある。かやうに佛邊では、三信を動じないのに、機受の方をば、信樂の一つで、あらはしたまふたのは、本願成就文の「信心歡喜」の一心（正依大經）「歡喜愛樂」の一心（異譯如來會）とあるによりたまふたものである。本願成就文は、阿彌陀如來の仰ではなく、釋尊の仰であるが、釋尊がかやうに、一心であらはしたまふたのはすでに第十八願の別願といはれる第三十五願に、「歡喜信樂」とあるによりたまうたのである。さうしてみれば、もと〳〵如來の本願の上に、三心卽一の規範があり、願と教とが、亦たさうなつてゐるから、もとより天親菩薩の私見で、なかつたことが明了である。しかし天親菩薩の意は、單に願や教の、模倣ではなかつた、範を願や經にとられた所以は、愚鈍の衆生をして、領解し易からしめんが、ためであつたと味ひたまふてあるが、そこに宗祖が、曇鸞の立場において、願(彌陀)教(釋迦)論(天親)の聖旨を、御自身に引きうけて、奉戴したまうた態度があらはれて、床しくも亦た、いみじき心地がするのである。

第三節　信　相　論

一　三信の體は、名號に結歸して、一つになつて了ふばかりでなく、三信の一つ〳〵が、お互ひに、他の二つと卽して、一つになるといふことをのべたのであるが、かくいへばとて、三信といふものは、すべて精神的現象であつて、物質的なものではないから、物理學の原則にしたがつて、物と物とが化合するやうに、考へてはならないのである。然れば一體といふことは、法義上の所談であると云はねばならない。いはゆる法義上の所談とは、法門の義理から、かくの如く云はれるのである。その法門の義理とは、三信そのものを、絕對他力といふ眞宗の根本義によつて(法門)、子細に吟味してみる(義理)ことなのである。けだし三信といへる信心は、絕對他力の信

心の外に、何ものもないのであるから、その一つ〳〵を子細に吟味してみると、その點において、一致することは勿論である。その一致する點を、卽一と稱し、三つの異なりたる表はれが、三信なのである。すなはち三信卽一の義が成立するのである。

二　だいたい三信は、我らの精神現象としての、信仰を指すのであるが、我らにはもと〳〵、信仰などといふやうな、立派なものがないから、之が他力廻向である、といふことを說くのが、三信本末論で、宗祖獨特の教義なのである。それだけこの三信の解釋には、深か味があつて、他流の如く、淺薄なものではない。他力廻向であるといふことを、押しきはめてみると、名號に結歸してしまふ、名號に結歸して了へば、三信のどれ一つをとつても、みな名號の外はないから、體は一緒だといふやうな解釋は、信體論であつたのであるが、今は、それと味はひ方がかはり、三信といへばとて、みな他力の救濟を、信ずるより方はないのである。これは我らの側からの味はひであるが、如來の側からいへば、我れ汝を救ふの、親心より外はないのである。その我れ汝を救ふの佛心が、他力の救濟であり、それを眞受けにしたのが、我らの三信である。眞受けにした上に、三信があるのは、我れ汝を救ふの佛心の側に、三信がなければならないからであると言ふやうな、心のはたらき具合を、如來の側と、衆生の側とについて味はふのが、信相論である。卽ち信體論は、この信何ものぞといふ問題であつたが、信相論は、如何に信ずるかとの問題である。

三　如何に信ずるかといふことは、普通の場合では、我らの信なることは勿論であるが、信卷では、如來は如何に信じたまひしやを、根本として解かれてある。これは普通からいへば、實に破天荒のことで、同時に眞宗の特色とするところである。然るによく〳〵自己なるものを考へてみると、我らには、眞實の信心なるものが、あらふ筈がないから、もしさうしたものがあるとすれば、如來の信心が、我らの信中に印現したものだと、味はふより外に、解釋のしやうがないのである。然らば、如來は如何に信じたまひしか、そこを解くのが、如來の三信である。曰く、至心・信樂・欲生である。

四　至心とは、斯卷の至心釋（本一八丁左）に從へば、「淸淨眞實」とある、この語の背景には、曇鸞大師の往生論註のお釋があることで、そんなところへ入り込んで說明すれば、限りもないことであるが、たゞ我らを助けたいのまごゝろなのである。信樂とは、信樂釋（本二一丁右）に「利他廻向」とあつて、我らには助かる力がないから、如來の御力で助けてやりたいといふ佛心なのである。欲生とは、斯卷の同じ釋（本二六丁左）に「招喚勅命」とあり、淨土に往生させるとのお呼び聲だとある。而して至心にも「疑蓋無雜」、信樂にも「疑蓋無雜」、欲生にも「疑蓋無雜」といはれてある。この無疑は「決定無疑」である、「かならず間違なく」といふことであるから、之を至心で味はへば、お助けのまごころに、ゆるぎがないこと。之を信樂で味はへば、他力のお救に、間違ひないこと。之を欲生で味はへば、きつと參らせて頂くこと。詮じつめてみると畢竟、「間違なく救

ふ」の、一つになるのである。然れば如來に在りて、三信はそのまゝ一心である。どの一心かといへば、「決定無疑」の一心である。之を法一といふ、すなはち、如來のお手元は、「間違なく救ふ」の、一つになつて了ふといふ意味である。その體は名號である。

五　すでに、如來のお手元が、かくの如くであつてみれば、その如來心が、我らの上に顯現してくだされた信心が、また一心の外にはないといふことも、うなづかれるのである。すなはち、「お助けに間違ひない」といふのが、機受の信相なのである。之を機受の上の「疑蓋無雜」とするのである。この語は、斯卷の三一問答章の、前後兩問答を通じて、七回出でゝをり、至心と欲生のお釋の下に二回づゝ、信樂のお釋の下に三回出でゝをる。しかもその中の一回は、特別に、信樂のみをあげて、「眞に知れぬ、疑蓋間雜なるがゆへに、これを信樂といふ」(信本一八丁右)といはれ、無疑といふことが、信樂であるとのお釋である。他の場合は、至心の義として、信樂の義として、欲生の義として解かれて居るに止まり、いはゞ三信共通の義なのであるが、此の場合は、信樂の特別な意味だと、したまふの思召があらはれてゐる、それだけ信樂の特殊的地位、とでもいふやうなものが、認められてあるのである。

六　ともかくも、「間違なく救ふ」の佛心を、「間違なくお助け」と受けとられたのが、信樂であり、それが我らの信心なのである。その時は、信樂といふのが、とりもなほさず、信心だから「信樂は、すなはちこれ一心なり、一心は、すなはちこれ、眞實の信心なり」(信本一八丁右)といはれてある。かゝる間違なきお助けは、信樂自體の義であると共に、至心の義でも、欲生の義でもある。至心でいはゞ、如來のおまことに、間違ひがないと受けとつたところ、欲生でいはゞ、參らせていたゞくに間違ないと受とつたところ。いづれも、信樂の間違ひないといふこゝろが、涉入してゐるのである、それだから前後兩問答とも、至心にも、無疑の義があるといひ、欲生にも、無疑の義があるといはれてある。この意味において、三信は、こゝろもちからいはゞ、中間の信樂で統一されることになり、三信卽一の義が成立するのである。もつとも之について、古來都名・別取の論が盛であるが、今は三信隨一の信樂で、他の二を統一するといふ、別取說で解しておいた。又、如來の三信が、我らの三信に顯現する狀態についても、法三機三、法二機一、法一機二、法一機一等、いろ〳〵込み入つた解釋があるが、いましばらく、名號の一法が、信樂の一心となりて顯現するといふ、法一機一說をもつて、味はつてみたのである。

第六章　信卷の要所（三）

――信の作用――

行の場合でも、一聲の稱名まで、押しつめて行きて、その一聲に、無上大利の功德があるといふことを說き、よつてもつて、所稱の名號の特異性をも、顯はしたまふた、行一念のお釋（行卷三九丁右）に至り、行のほんとうのうま味が、出て來たともいはれるのである。ところが、あの行一念のお釋のところに、「凡そ往相廻向の行信について、行に則ち一念あり、また信に一念あり」といはれ、その行の一念を、直ちに解きたまふたけれど、信の一念には、何らのお釋がなかつたのである。それは行卷であつたからであるが、いま信卷にいたり、いろいろと他力の信心の、體や相について、解きたまふたのち、前に保留されてゐた、信の一念を解きたまふ、順序になつて來たのである。一念といふのは、信じぶりをいふのであつて、矢張り信相の問題である、そこで三信論、就中信相論につゞいて、この問題が、當然出て來る譯なのである。しかるにお釋の內容は、一念の信でありながら、かやうな廣大な功德がそなはつてゐると、信の利益を讚えたまふてゐるのである。故に已下信益論として、之をうかゞふて見やうと思ふ。

第一節　信益論

一　他力の信は、一念の端的に、廣大無限の大益を收めることができるのである。信卷末の冒頭にいはく

それ眞實の信樂を按ずるに、信樂に一念あり、一念とはこれ、信樂開發の、時尅の極促をあらはし、廣大難息の慶心をあらはすなり

極促といふは、もうこの上は、時間を短かくすることのできぬほどの、最短の時間のことである。瞬間といふも、なほおろかなりで、眞に電光石火のあひだである。かゝる最短の時間で入れる信仰を、信樂だといはれる意味は、我らの心の計らひを超越した、絕對の信だといふことをあらはすものである。そこには心の計らひをさしはさむ餘裕が、毛頭だもないのである。世間の一般の通念では、よいものは、長くかゝると考へられるのであるが、それは自分の計らひを、加ふる場合のことである。いまの他力の信心は、如來のお手元から、永劫修行の結晶だる名號を、廻向さるゝことによつて成立するものであつて、時間の長短などは問題ではない、併し他力廻向といふことをあらはすためには、最短の時間で語つた方が、よくわかるのである。

二　一念を、一心といふ意味に、解したまふ場合もある、「一念といふは、信心、二心なきがゆへに、一念といふ、これを一心となづく」（信末二丁右）といふお釋がそれである。これは時間的の表現ではなく、空間的の表

現である。對象を彌陀一佛におき、一心一向に、傍目ふらずに、一向專念することである。これは矢張り、他力の信心の特異性の一つであつて、勿論、前にのべた、三卽一の信樂の、特性にちがひはないのである。しかるに今はさういふ、横の一念をいふのでない、竪に最短の時間について、信樂とは一念なりと、いはれたものである。もちろん記憶などにかゝるやうな、時間ではない、我々の記憶にかゝるやうな時間は、いまのいはゆる一念といふものから見ると、よほど距離のあるもの、卽ち長い時間なのである。また記憶などを云々するのは、まだ計らひの世界で、他力信樂の世界でない。記憶にはかゝらないが、疑ひの心を、無くしていたゞいた、その境ひ目、そこが一念なのであつて、それを契機として、無疑の心境が、相續して盡形壽におよぶのである。

三　かくの如き、危機一髮といはふか、電光石火といはふか、ともかく微妙不思議な機會に、成立する信相が「廣大難思の慶心」だといはれるのである。次にお引きになつた、大經成就文の「信心歡喜」や、如來會の成就文の「歡喜愛樂」が、それなのである。のちに宗祖のお釋にある通り「歡喜といふは、身心の悅豫を形すの貌なり」(信末二丁石)で、一大安堵心のことで、いまだ身心の表相に、あらはれて來るやうな法悅はない、それが漸々にあらはれて、身心生活の上に、法悅相をあらはして來ることは勿論である。かゝる場合における信益を、十種に分ちて讃えられたのが、現生十益(信末二丁右―左)であり、かくの如き信益を體得するの人を、眞佛弟子(信末六丁石)なりといはれてある。十種の益は、何れも法德に關するものである。いはゆる具體的の表現ではあるが、物質的表現ではないのである。從つて迷信をさしはさむ餘地がないのである。

四　現生十益と眞佛弟子との間(信末三丁右)に、宗祖獨特の疊語法を以て、信の性質を讃えたまふてある中に、「度衆生心」だとか、大慈悲心だとかいつたやうな、信の社會性をあらはす語があるが、そこにもまた、如來の利他心の顯現を味ふことができるのである。のちにのべるであらうところの「信と生活」の、根本的理由になるのである。それから又、横超の語について、二雙四重の教判が出てゐる(信末四丁右)、これと略ぼ同じやうなお釋か、前(信本三十丁左)の大信海のお釋のところにも出てゐたのである。この二ケ所のお釋のこゝろは、畢竟、解脫道としての、信の最高地位を、たゝえらるゝに在るのであつて、矢張り信の利益に關するものである。このお釋の下に引かれた、善導大師の往生禮讃(五丁左)の一部の如きは、信の利益を讃ふるものであると共に、信と生活に關する意義深い啓示である。

仰ぎ願はくは、一切の往生人導、善く自から、己れか能を思量せよ。今身に彼の國に生ぜんと願はむものは、行住坐臥に、かならずすべからく、心を勵まし、己れを尅して、晝夜に廢することなかるべし。畢命を期として、上、一形にあるは、少苦に似たれども、前念に命をはりて、後念に彼の國に生じて、長時永劫に、つねに無爲の法樂を受く、乃至成佛まで、生死を逕ず、豈に快しみにあらずや、知るべし

第二節　信と生活

この節において、信の現益として、眞俗二諦の問題を說いてみやうと思ふたのであるが、制限頁數を超えたから、已むを得ず、第四卷（證と眞佛土）の講讃のあとに、加ふることゝした。問題の性質上、かくの如くすることも、敢へて不都合でなからふと思ふのである。同卷を讀まるゝにあたり、範圍は、信卷の要所の一つである、といふことを知つておいても頂きたい。

聖典講讃全集第八回配本・昭和十年七月十日印刷
昭和十年七月十八日發行・編輯者宇野圓空・發行
者東京市小石川區諏訪町五九番地小山久二郎・印
刷者東京市牛込區改代町二四番地田中末吉・・・
發行所小山書店・振替口座東京六八〇